

昔話研究と女性——ドイツ——

間宮 史子

この報告では主に、ドイツの昔話と昔話研究における女性について扱う。その際、「女性」のみに焦点を絞るのではなく、昔話や昔話研究を「男性／女性」という性別の観点からみる意義を考えるとということが含まれる。ドイツをはじめとするヨーロッパの場合を報告することで、「口承研究と女性」というテーマを考える手がかりのひとつを示すことができれば幸いである。

ドイツ民俗学における女性研究

ドイツ民俗学において、女性研究というテーマは一九七〇年代以降論じられるようになった。女性に焦点をあてること、それまで顧みられなかった女性の生活のしかたを見いだすこと、男性の視点が支配的である学問の状況を批判すること、これらが原動力となり、ドイツ民俗学会内に女性研究委員会が設立されたのは一九八四年のことである。八〇年代、九〇年代を通して、女性研究はさらにジェンダー研究へ発展していく。ジェンダー研究では、女性は切り離され孤立した他者としてではなく、

男性との関係でとらえなおされるようになる。このような女性研究の発展とあいまって、口承文芸研究における女性研究、つまり、口承文芸における女性のステレオタイプや女性像が研究されるようになったのは、やはり七〇年代後半になってからのことである。^①

ヨーロッパにおける「女性の語り手」のイメージの普及

ハンススライエルク・ウターは「ヨーロッパに拡がったメルヒェンの流行にとつて、特に忘れてはならないものとして、ペロアの『過ぎし昔の物語ならびに教訓』があ」とし、その表題紙に描かれた、乳母とその「がちょうおばさんの話」に耳を傾ける三人の子どもの絵に触れている。そして、「ここに示されているように、語ることは乳母などの使用人のすること」^②、注意深く耳を傾ける子どもたちに囲まれたひとりの女性の語り手、というまさにこの場面が、それに続く時代において、ヨーロッパで好まれる絵のモチーフに発展し、「女性の語り手」後に、ヨーロッパにおける一般義務教育とそれに結びつけられた識字教育の導入によって、読み聞かせをする女性にとつてかわられ^③た、と述べている。

「女性の語り手」のイメージがヨーロッパに拡がるのには、グリム童話も一役買った。グリム兄弟が昔話を聞き書きした当初の語り手が、都市の上流市民階級の若い女性たちであったことは知られている。『グリム童話集』初版第一巻の刊行（一八一二

年)後、グリム兄弟はドロテア・フィーマンという当時五代後半の女性に出会い、四十話以上を聞き書きした。初版第二卷(一八一五年)には、そのフィーマン夫人の語った十五話をおさめ、序文で彼女について名前をあげて言及している。そしてそれは、多少の変更を伴って、第二版(一八一九年)以降の序文にも保たれている。

(前略)カッセル近郊のニーダーツヴェールン村で、ひとりのお百姓のおかみさんを知ったことでした。この人が、第二巻のほとんどの美しいメルヒェンを語ってくれたのです。フィーマンおばさんは、まだかくしゃくとしていて、五十歳をそう多くはこえていない人でした。その顔だちには、なんとなくしつかりした、ものわかりのいい、楽しい感じがあり、大きな目は、明るく、するどく光っていました。(中略)フィーマンおばさんの語りかたはゆつくりしていて、たしかで、とても生きいきしていて、自分自身で、それによる喜びを感じているようでした。はじめはまったく自由に語るのですが、もう一度とせがまされると、もう一度ゆつくり語ってくれるので、すこしなれると、書きとることができました。(中略)フィーマンおばさんが、お話を正確に語り、話をまちがえないようにと強く心がけているのを一度きくべきでありましょう。彼女は、くりかえして語るときにも、話のなかのなにかをかえるということは、けっしてありませんでした。そ

して、なにかまちがいに気づくと、話のさいちゅうでも、すぐに自分でなおしました。^③

ここには、グリムが語り手としてフィーマン夫人のなにを評価していたかが明示されている。リンダ・デークは、グリムによるフィーマン夫人のこの描写が、子どもの「語り婆」にふさわしいイメージとされるようになったこと、さらに、それが後に続く昔話集のお手本となり、「女性の語り手」のイメージが定着していくのに寄与したとしている。^④

デークは、伝統的な語りの二つのモデルとして、女性が子どもに聞かせる語りと、年寄りの農民がその土地の人々に聞かせる語りをあげている。前者は都市の子どものための教育あるいは娯楽の素材となり、いわば伝統的な口承話である後者は、教養層には興味をもたれなくなって農村にその伝承基盤を見つけて、その両者が融合するのが『グリム童話集』であるという。グリムに高く評価され、「お百姓のおかみさん」とされたフィーマン夫人が、実は仕立て屋の夫人でフランス系移民の子孫であったことは、ハインツ・レレケによって明らかにされているが、『グリム童話集』第二版序文のフィーマン夫人についての言及は、語り手とその話の特徴づけられた最初と見なされるという。^⑤

昔話と昔話研究における女性

『昔話百科事典』に「女性(Frau)」とそれに関連する項目が掲載され刊行されたのは、今から二十年前の一九八七年である。「女性」⁽⁶⁾を執筆したエルフリーデ・モーザー＝ラートは、まず「このテーマへの関心は比較的新しく、民俗学的な口承文芸研究では「ヨーロッパの口承文芸における女性像についてのまとまった研究はまだない」としている。そして、女性研究者の増加に伴って女性のテーマが増えたこと、女性によって準備・計画されたいくつかの研究大会が行なわれたことに触れ、その成果の一例として、ヨーロッパメルヒェン協会の『昔話における女性』をあげている。

昔話を始めとする口承文芸に登場する女性のタイプについて、モーザー＝ラートは次のように分類して記述している。

・肯定的にとらえられる女性の役割―①受け身の美女、②罪なく誹謗／迫害される女性、③積極的な女主人公、④賢い女性、⑤母性、⑥家庭的であること

・女性の否定的な特徴―①女性蔑視の起源、②意地悪、③支配欲、④虚栄心、好奇心、冗舌、⑤好色

多様な女性像が認められるが、とりわけ、女性の特性や行動様式が男性的な社会秩序によって規定される役割分担と一致するとき、それは必ず肯定的に強調されるという。女性の美しさは、男性の願望に添っているし、女性が賢さや積極性を発揮す

る場合、それは男性に有利な結果となる。女性の貞節、適応能力、忍耐、献身、家事能力は明らかに高く評価される。このような価値や規範は、百五十年程前までは女性自身にも疑問視されなかった。そして、語り手、調査者、再話者や編集者の性別が、女性像というものをどの程度まで変えてきたのかという検討は始まったばかりだと述べている。

グリム童話やヨーロッパの昔話における女性像の研究は、一九八〇年代以降目だつようになり、さまざまな方向から研究されるようになった⁽⁷⁾。また、女性像をテーマにした昔話集も編集され出版されるようになった。

「女話(Frauenmärchen)」⁽⁸⁾という術語は、デアークによると、紡ぎ部屋で女たちが語る話をあらわすことばとして一九三五年に初出した。いつの時代でも、語りは女性のすることと特徴づけられてきた。女性は、家庭におけるその役割にふさわしく、子どもや娘や女の仕事仲間を話でもって論ず素質をもっているという。さまざまな資料集はしかし、女性の語り手に劣らず、多くの男性の語り手について報告している。男性の語り手は、男女入り混じった聴衆に、あるいは、もっぱら仕事の場合や余暇に大人の男性に対して語る。伝統的な昔話伝承地域での調査報告によれば、語りは男性のすることとされている。それゆえ、女話の概念は、特徴的な女性の語り手の役割とはなにか、また、女性が女性の聞き手に特化したレパートリーをもつか、という二つの観点から検討されるべきだとする。

女性の語り手の役割について。古代より女性は生来の語り手とされている。しかし、「乳母のメルヒエン（『たわいのない作り話』）「老婆の作り話」といったことは示すように、女話は、家庭生活のなかで乳母やお手伝いが子どもの楽しみやしつけに用いたもので、単純で、ばかかいて、たわいのないものとみなされていた。それが、十七〜十九世紀にどう変遷するかについては、前項（ヨーロッパにおける「女性の語り手」のイメージの普及）と重なるので、ここでは詳述しない。デークは、現代の、本から話を覚えて語る語り手についても触れ、ドイツやフランス、アメリカ合衆国の「現代の語り手」は、女性が優勢であるという。そして、アメリカ合衆国の語り手のレパトリーをみると、女性が昔話やお化けの話を好んで語るのに対し、男性は小話や実生活に根ざした体験話を好んで語るとしている。

女性のレパトリーについて。女性が女性に語る話については、いくつかのカテゴリーがあるとする。女話としてあげられているのは、伝統的な地方社会における、a 女主人公が活躍する魔法昔話および現実的昔話、b 若い女性の教育のために適した笑話、そして、地方のみならず、近代的な都市社会でも認められるようになった、c 自伝的な話、である。過去百年間に出版された昔話集において、女主人公が活躍する話の占める割合が、男主人公が活躍する話よりも増えていることは、昔話がよりいっそう女性指向のジャンルになっていることを示すという。一方、伝承の語り手の場合、女主人公の話の方が多くなる

傾向はみられないと述べて、三人の女性の語り手の例をあげている。彼女たちは、いずれも身近な男性から話を聞いた。そして、男性の語り手のレパトリーにおいても、女主人公と男主人公の話の割合は、やはりこれと同様であると述べている。デークは、女話は「定まらない、時や場所に限定されて変わりうる概念」であるとしている。

昔話と昔話研究における男性

「男性 (Man)」とそれに関する項目が載った『昔話百科事典』が出版されるのは、「女性」に関する項目の十年後、一九九七年である。一九七〇年代に女性の役割や女性像が研究されるようになった後、八〇年代、九〇年代に男らしさや男性主人公の観点が扱われるようになった。この項目の執筆者クラウス・ロートは、話のジャンルと語り手の性別の間には関連がみられるとする。愉快な話やほら話に登場するのは男性で、そのような話は男性によって語られることが多い。笑話を語るのは、もっぱら男性であるとされてきた。しかし、性別による話のジャンルの分類は、決して普遍的なものではないという。

口承文芸における男性の役割と男性像の項では、男性主人公の評価は、語り手や語り手のコンテクストのみならず、文化的観点にも左右されると述べる。口承文芸の多くのジャンルで、主人公の大半が男性であることは、男性の役割とタイプが多いということである。男性の性格は、それが肯定的であれ否定的で

あれ、女性より極端であるという。しかし、男性の役割をいくつものタイプに分けることは困難であるとして、肯定的／否定的／否定的にとらえられる役割に分けて記述している。語り手あるいは聞き手としての男性については、女性が家庭内で語ることが多いのに対し、男性は公共の場所で語ることが多く、男性と女性のレバトリーは異なっており、昔話の場合、語り手の性別と昔話のタイプには明らかな一致があるという。そして、レバトリーだけでなく、日常のコミュニケーションの仕方や、語り方にも性別による特徴が認められる。さらに、従来、調査者や研究者、再話者や編集者や出版者がほぼ例外なく男性であったという事実が、口承文芸の伝承にいかに影響したかという検討がされるべきだと述べる。

ライナー・ヴェーゼによると、「男話 (Männemärchen)」は「女話」に対する概念で、男性によって、または男性のために語られる話のことを意味する。「女話」と同様、時や場所によって変わりうる概念である。ヴェーゼは、昔話が男性と女性のどちらにより語られてきたかと問うならば、社会的、文化的、経済的な観点から疎かにされてはならないという。そして、語りは女性の仕事とされてきた事実を顧慮せずに、二十世紀初めから最近に至るまで多くの研究者が、ヨーロッパでは十九世紀までは男性の語り手が支配的だという考えを前提にしていると指摘する。また、男性の語り手は社会の下層の出であるといった従来の通説は相対化されるべきだという。限られた範囲の語り手

から話を聞くという調査者側の事情は資料集に反映するので、十九世紀から二十世紀初めの昔話テキストは、ほぼすべて、自然な語りの状況で記録されたものではない。十九世紀以降、男性の語り手が減少したのは、都市化や技術化で伝統的な語り場の消失し、特に男性の語り場への影響が大きかったことによる。さらに、二十世紀後半に欧米でおこった「現代の語り手」としての男性は、女性に比して目立たないという。

昔話の内容と話型については、同話型の話において語り手の性別で違いがみられることを述べ、男性あるいは女性に特徴的なサブタイプが存在する例をあげている。男主人公の活躍する昔話は、女主人公の昔話より多く存在し、男性の語り手により多く語られる。男性の語り方については、未知のことが多い。伝承の語り手のレバトリーを分析すると、男性と女性の語り手の違いは、そのテーマによりも表現のしかたにあるという。

「口承研究と女性」のこれから

ドイツの昔話と昔話研究における女性について全体像を伝えるのは、もとより私の手に余ることで、ここでは研究の流れに沿って大まかに報告したに過ぎない。「女性研究」から発展した「ジェンダー研究」では、「男性」と「女性」は補完概念としてとらえられる。一九九七年開催の第三十一回ドイツ民俗学会の大会記録『男性的、女性的』¹⁾が刊行されているが、ここには「フィールドワーク 男性的、女性的、人間的」や「ジェンダー

レクト (= gender + dialect)」といったタイトルが見える。口承研究のこのような観点は、ヴァインカー＝ビーフォなどが指摘するように、ポストモダンの、ポストフェミニズムの研究指向である。

本シンポジウム当日にも指摘されたことだが、このテーマには、複数のレベルが存在する。話の内部の問題、話の伝承経路や語る話との関係といった語り手の問題、語りの場や聞き手といった語りのコンテクストの問題、そして、口承をとり扱う調査者や編集者、研究者や再話者や出版者の問題。日本の口承研究における女性あるいはジェンダーについては、まだこれから調査検討されなければならないことが非常に多い。

付記 本稿は、日本口承文芸学会第五三回例会のシンポジウム「口承研究と女性」において報告したものをもとに加筆修正したものである。

注

- (1) Lipp, 2001: 329-340.
- (2) ウター、二〇〇三:二五。ペローの『過ぎし昔の物語ならびに教訓』は二六九七年刊。
- (3) 一八一九年第二版の序文(小澤俊夫訳)。グリム兄弟、一九八五:四七七―四七八。
- (4) Degh, 1987: 213.

(5) Degh, 1984: 319.

(6) Moser-Rath, 1987: 101-129.

(7) たぐね¹⁴⁾ Kohler-Züch u. Shojaei Kawan, 1988¹⁵⁾ ボティックハイマー、一九九〇、ヴァインカー＝ビーフォ、二〇〇七など。

(8) Degh, 1987: 211-216.

(9) Roth, 1997: 144-162.

(10) Wehse, 1997: 222-230.

(11) Kohle-Hezinger u. a. 1999.

引用・参考文献

- ボティックハイマー、ルース 『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』鈴木晶ほか訳 一九九〇 紀伊国屋書店
- グリム兄弟 『完訳グリム童話―子どもと家庭のメルヒェン集―Ⅱ』小澤俊夫訳 一九八五 ぎょうせい
- ウター、ハンス・イェルク 『ヨーロッパのメルヒェン』間宮史子訳 『子どもと昔話』十五号 二〇〇三
- ヴァインカー＝ビーフォ、ザビーネ 「ホレばあさんとその姉妹―ドイツの昔話における女性の魔的な力」加藤耕義訳 『子どもと昔話』三十三号 二〇〇七
- Degh, Linda: Erzählen, Erzähler. In: Kurt Ranke u. a. (Hg.): Enzyklopädie des Märchens. Band 4, Berlin, New York (de Gruyter) 1984, S. 315-342.